

ぴんぽんぱらど

平成³⁰年1月31日 ほか

25号

- 第21回 人権フォーラム 開催報告
- 新生たんぽぽの取り組みと課題
- わたしのニヤリ・ホッと
- 川柳ぽーど



第21回 人権フォーラム 開催報告

共生社会への道のりと課題

～見えない壁を打ち破れ～

平成29年3月5日(日)、リロの会議室飯田橋において東社協知的発達障害部会人権擁護委員会主催の第21回人権フォーラムを開催しました。

午前は東洋英和女子学院大学教授の石渡和美氏による「共生社会への道のりと課題～津久井やまゆり園の事件からみえたもの～」と題しての講演、午後は「みんなが生きやすい社会に向けて、私たちにできること」と題して、特定非営利活動法人ピープルデザイン研究所代表理事の須藤シンジ氏と走行中に転倒し脊椎損傷になった元ロードレーサー青木琢磨氏による講演とクロストークを通し、私たちがすべきこと、福祉業界がどうあるべきかを考える時間になりました。

「共生社会への道のりと課題」～津久井やまゆり園の事件からみえたもの～

講師：石渡 和美氏

平成28年7月26日未明、神奈川県「津久井やまゆり園」において、施設を利用されている方が刃物で切りつけられ、19人が亡くなり、26人が重軽傷を負うというたいへん痛ましい事件が発生しました。事件の犯人は同施設の元職員で、障害のある人の存在や人格を否定する供述をしているとの報道がなされています。この事件は、残された入居者の今後の住まいや適した施設整備のあり方、福祉施設における安全管理体制、障害者への偏見や差別的思考、福祉人材の育成、措置入院制度の在り方など多岐にわたる課題を残しています。

1 事件の経過と検証委員会

講師の石渡さんは、津久井やまゆり園事件検証委員会の委員長をされたお立場から、検証委員会の報告書とは違う内容で報道された点も含めてお話をしてくださいました。検証委員会は、事件について事実関係を把握した上で、県や指定管理者である社会福祉法人かながわ共同会が行った対応について専門的な見地から検証し、今後の再発防止策を検討することが設置目的です。全7回の検討が行われ、報告書は神奈川県ホームページで閲覧することができます。

この事件は、犯人が犯行の5か月前に衆議院議長公邸や自由民主党本部に出向き、具体的な犯行方法が記された手紙を渡しており、この手紙は警視庁から津久井警察署に情報提供されています。2016年12月5日の福祉新聞は、「指定管理者として施設を運営する社会福祉法人かながわ共同会に県警が容疑者の手紙を見せなかった点については、手紙の内容は共同会に伝わっていたと判断。情報は共有されたが、危機意識



に温度差があったとした。一方、手紙の存在を県に報告しなかった同会の対応は『非常に不適切』とし、再発防止に向け防犯対策など福祉施設に多くの宿題を課した。」「最大の検証ポイントは県警が手紙を共同会に見せなかった点。報告書は、県警対応を疑問視した当初の論調から大きくトーンダウン。」と報道しています。

石渡さんは、「どちらともとれる表現の報告書」、「手紙を見せていたら対応は変わった。防げていたかは別として、結果は違ったであろう。」と忸怩たる思いをにじませておられました。

2 障害者差別と優生思想

次に、今回の事件の根底にある差別や思想について、多くの方の発言を紹介してくださいました。

- 差別解消法の趣旨は、誰もが分け隔てなく差別されない社会をめざすもの。容疑者の行為や発言はこの対極にあるもので、あってはならない。(尾上浩二氏：DPI 日本会議副議長)

- 命を奪われる怖さと人間の尊厳を否定される怖さ。障害者には二つの衝撃が走った。(藤井克徳氏：日本障害者協議会代表)
- こうした無抵抗の重度障害者を殺すということは二重の意味での「殺人」と考える。一つは、人間の肉体的生命を奪う「生物学的殺人」。もう一つは、人間の尊厳や生存の意味そのものを、優生思想によって否定する「実存的殺人」である。(福島智：東京大学教授)

また、1970年に横浜市で起こった障害児殺害事件を発端にした、犯人である母親への減刑嘆願署名運動、それに対する神奈川青い芝の会の反対運動もご紹介いただきました。経済効率優先の価値観は、労働能力によって人間の価値に優劣をつけ、出生前診断や障害新生児の治療停止に連鎖し、今回の事件の匿名報道へとつながります。

3 障害者の地域生活と「共生社会」の実現 ～ノーマライゼーションからインクルージョンへ～

障害者を特別視する障害者観を払拭するためには、障害というものの正しい知識を普及する広報活動ももちろん大切ですが、社会の色々な場面に種々の障害のある人がいるのが当たり前

という状況にする必要があります。

「街に慣れる、街が慣れる」という味わい深い標語があります。障害者はどんどん街に出て街に慣れる。そのことによって街は、街に住む人々の意識も含め、障害者がいることを前提とした社会になっていきます。

4 エンパワメントと「地域再生」

石渡さんは、「エンパワメントの連鎖と地域社会再生への希望」と題して、西宮市社会福祉協議会の清水明彦さんの言葉を紹介してくださいました。「本人の意思に寄り添う個別の支援を重ねることは、本人の力を高めるとともに、支援者、親・家族、地域の人など周囲の人々、さらに市民全体のエンパワメントにつながっていきます。本人中心で(本人の希望に基づいて)支援展開することが、『地域社会再生への希望』をもたらします。」私たちが日々行っている支援活動は、その中から生み出されてくる、一人ひとりを主人公にした本人の物語を紡ぎ、次の希望が見出されていくため「本人のあり様への支援」であると言えます。私たちが担う日々の活動は、本人の希望に基づく計画とその実現の中で、本人の存在を社会に活かしていく創造的活動の展開(本人中心支援の展開)を目指していくものという原理を再確認する時間となりました。

みんなが生きやすい社会へむけて、私たちにできること

講師：須藤 シンジ氏 ゲスト：青木 琢磨氏

「心のバリアを『わくわくドキドキ』破壊していく。」「障害者と健常者が共存できないのは、双方に『心のバリア』があるから。」須藤さんは、「ピープルデザイン」という新たな概念を立ち上げ、障害の有無を問わずハイセンスに着こなせるバリアフリーアイテムや、各種イベントをプロデュース。2012年にはNPOピープルデザイン研究所を創設し、代表理事に就任されました。高齢者、障害者、子育て中の母、LGBT、外国人等マイノリティと言われる人々との共生を促す「ダイバーシティ」の実現を最終目標とされています。次男が重度の脳性麻痺で出生し、生まれた当初、医師から「一生寝たきりだろう」と告げられました。そんな重度の障害をもつ子どもの親になり、いろんな障害のある子どもたちやその家族と触れ合い、障害者を取り巻く日本の福祉の環境を知ったときに、とてつもなく地味な世界だなと感じたそうです。障害児の親となって初めてわかったことは、「こういう世の中は障害をもつ本人やその家族にとって居心地がいい社会であるわけがない。」だから次男が成人したときに少しでも暮らしやすい社会に変えたいと思い、自分もってる知識やノウハウで次男を取り巻く福

祉の環境、あるいは日本の習慣を変えるために何か行動を起こそうと模索し始めました。

ピープルデザインのプロジェクトは「ものづくり、コトづくり、仕事づくり、ヒトづくり」の4領域です。「コトづくり」では、さまざまなイベントを開催しています。例えばブラインドサッカーの体験会では、子どもたちがアイマスクをして目の見えない状態でプレイすることで、声をかけ合うことの大切さや、目の不自由な人との接し方を体験できます。子どもの頃から障害者と接する機会を提供することで障害者のいる場が普通なんだという意識をもってもらうためです。18歳で失明したブラインドサッカー日本代表の加藤健人選手や有名スポーツ解説者などを講師に招いて渋谷と川崎で4年前から行っており、企業研修としても採用されています。

ゲストとして今回は、元ロードレーサーで現ラリー>ドライバーの青木琢磨さんが登壇くださいました。1998年、テストコースでGP開幕前のテスト中に転倒、脊髄を損傷し下半身不随となります。「怪我をした」というイメージだけで障害者になったという自覚はなかったそうです。自立で座位保持ができない、トイレが大変、

一番嫌だったのは店に入れないので好きなご飯屋さんに行けなくなったこと。人に頼むことが多くなり、それを申し訳なく思う気持ちから内向的になったそうです。

青木さんは、脊椎損傷の人が集まるマイアミプロジェクトに参加して考え方が変わります。世界各国からマイアミプロジェクトに来て、日々リハビリを行います。最初の問診の際に、医師から何をしたいか尋ねられ、「なんでもできる」と言われました。まずは肩を強化し、残された筋肉をつけて自分の機能を高めます。青木さんは、治る・治らないの前に、残された部分を使ってトライできるようにするという考え方が、日本とアメリカの異なるところと強く感じました。

青木さんは言います。「ショッピングセンターのエレベーター内で親子と一緒にあった時、子どもがじっとこちらを見ているので、『車いすを触って良いよ』と伝え、触ろうとした子どもに親が『だめ』と止めたことがありました。エレベーターを降りる間際、子どもに対して母親が『悪いことをするとああいう風になるよ』と言ったのを聞いたとき、心から恐怖を感じました。無知は恐怖です。日本を変えて行かなければいけないと思います。無知を知りにしていかなければ日本は変わらない。車いすになってもレースを続けているのは、レースが好きだからだけではなく、みんなに知ってほしいから。目立つためにやっている。車いすだからといって、それ



は関係ない。車いすが必要な人もいればそうでない人もいるだけ、そんな感覚を多くの人に伝えていきたいのです。」と。

須藤さんと青木さんのクロストークで、「この先50年日本は変わらないと思う。若い人には日本を出ることを勧める。日本を外から見ることでもどこがおかしいのか見えてくることがある。日本を再生するためには必要なこと。」と力説されます。会場からの質問に「そうは言ってもいきなり海外に行けない人がほとんど。そのような人が日常生活でもできることは、一番近い誰かを救うこと。しかしやっぱりできるならば福祉から離れて、なおかつ日本から離れることをお勧めする。政治にも関心をもってほしい。従来の福祉ではなくやり方を変えて行くことが必要。」と熱く語られていました。

参加者の感想です

もっと若い時にお聞きしたかったです。しかし!まだできることはあると思わせてくれる内容でした。

今まで私が見てきた、感じてきた福祉の視点とは、180度違う福祉を知ることが出来ました。午前の講義であった、「無知、無理解」についての考え方の視野が広がりました。福祉施設で見ている世界は狭いということに気付きました。私にできることは何か…考えていきたいと思えます。

だいぶ濃い一日でした。整理して自身の働いている所の職員に伝えようと思えます。インクルージョンという視点が、今思うところの福祉と一致していて、この流れが浸透していく努力を私たちはしていかなければならないと感じました。

このままでは良くない、変わらなきゃ、という思いはあっても、どうしたら良いか、どう現状をとらえ、どう考え行動していけばよいか、迷いや「そうはいつでも無理…」という心のバリアに気付くきっかけとなりました。いろいろ刺激的なお話でした。ありがとうございました。

「共生社会への道のりと課題～見えない壁を打ち破れ～」と題した今回の人権フォーラムも、支援現場で働いている多くのみなさまにご参加いただきました。障害のある方を取り巻く背景や環境を、様々な角度から再確認した時間となったのではないのでしょうか。

最後に、お忙しい中、貴重なお時間を作っていただきご講演くださった、石渡和実さん、須藤シンジさん、青木琢磨さんに、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

(人権擁護委員会一同)

新生たんぽぽの取り組みと課題

人権擁護委員会 じんけんBoard 編集委員 松下 功一



平成25年6月、日本知的障害者福祉協会全国施設長等会議の休憩時間、東京国際フォーラムで「東京で大変なことが起きているんですね」と千葉県施設長から話しかけられた。西東京市の障害者支援施設「たんぽぽ」で、日常的に虐待が行われていたとYahoo!ニュースがトップで報じているタブレットをその場で見せてもらった。私の勤める法人にも「たんぽぽ」を退所して、グループホームで生活している人がいる。その方は施設内でどんな生活を送っていたのだろうか。知的発達障害部会の役員の方々が第三者委員として調査に入っていたことを、この年度から人権擁護委員会に参加した私は知らなかった。

「たんぽぽ」は知的に障害のある子の親が中心となり、平成12年4月に開所した西東京市にある入所型の施設である。今回問題になったのは平成24年8月の利用者殴打事件である。新聞のみならずテレビや週刊誌で報道されたので詳細は省くが、後の第三者委員による報告によると、問題になった一件以外にも、42の不適切な行為の内14を虐待行為と認定している。

あれから4年半、2年間の指定一部取り消し処分、第三者委員や東京都を相手取っての裁判の

取り下げを経て、平成27年夏、施設存続も危ぶまれた土俵際から、ようやく理事組織の大幅刷新と管理職の設置に至ったと聞いた。生まれ変わった社会福祉法人田無の会「たんぽぽ」の、新たな取り組みと今後の課題を高橋加寿子副施設長(取材当時、平成29年7月より施設長)に伺った。高橋さんは上記の大改革後の平成28年2月よりたんぽぽに副施設長として就任、事件発覚当時は、東社協人権擁護委員としてたんぽぽの出張研修会や行事へのボランティア参加など、少なからずたんぽぽに関わる機会があった、ということが印象的である。

新たな取り組みを「1つの『やめてみた』と5つの『やってみた』と分かりやすく説明してくださった。やめてみたことは、職員の制服。男性はブルー、女性はピンクのポロシャツやトレーナー。今までしていたことをやめるのは誰にとっても抵抗のあることだが、一部の職員からは反対の声があったという。制服は無意識うちに「利用者と職員は対等である」ということを阻害していたのかもしれない。やってみたことの1つ目は、機織り・紙工・工作教室や読み聞かせ、音楽演奏などのボランティアの受け入れ。2つ

目は、月2回の「カフェたんぼぼ」のオープンだ。西東京市社会福祉協議会のほっとネット推進員（地域の課題を発見し、地域福祉コーディネーターと協力しながら解決に向けて協力する市民ボランティア）により運営されている。3つ目は地域との連携。近隣小学校の職場体験学習の受け入れ、市内他施設や相談支援事業所との連携、地域自立支援協議会への参加を通してネットワークを広げている。4つ目は行事の見直しで、しばらく実施できていなかったバスハイクを実施、また施設内部のみで行っていた「たんぼぼまつり」は、平成28年9月に「たんぼぼ感謝祭」と名称を変えて実施、外部から大勢のお客様を迎え、たんぼぼの現状と感謝の気持ちを発表することができた。5つ目は職員が気持ちよく使えるよう、働く環境のリニューアルで、支援員室の備品や公用車を新しいものに入れ替えた。

短期間にハード面・ソフト面の取り組みをされたことのご苦勞をお察しするが、改革はまだまだ続く。毎月のモニタリングを通しての、東京都福祉保健局居住支援課、西東京市障害福祉課などの行政サイドや、家族連絡会の定期的開催でご家族が意見を言いやすい環境づくりをするなど、関係性を再構築した。昨今、職員の確保はどここの事業所でも大きな課題の一つであるが、今までハローワークのみであった求人地域を折り返しチラシへの掲載やPCネット環境を活用しての応募受付、口コミなど媒体を拡大し、ホームページも刷新した。採用した職員へは、利用者の基本情報や業務にあたるうえでの心構えを一人ひとりに丁寧にオリエンテーションし、OJTノートによる記録も取り入れた。高齢化や強度行動障害などの支援の専門性を向上させるため、組織体制を再構築し、講演会の開催、内部研修の充実、各種研修への職員派遣にも力を入れている。避難訓練の毎月実施、非常時用ベンダーの設置も行った。

平成27年9月に2年間の指定一部取り消し処分が解除され、新規利用者の受け入れができるようになった。空きベッド6床を埋めるためには、職員を増やしレベルアップを図らなければならない。これこそが入所型施設の本来の役割である。「入所施設が求められていることを改めて感じた」と高橋さんは語る。3床ずつ2回に分けて新規利用者を募集したが、どちらも15倍を超える倍率、最高倍率は43倍であったそうだ。

児童施設の高齢児、精神科病院の社会的入院からの退院促進、両親の高齢化、グループホームでの生活が難しくなった人と、入所施設を求めている人は増え続けている。

次に今後の課題について伺った。まず初めに取り組まなければならないのは、生活介護の活動内容の充実だそうだ。パン班は窯がありながら1年以上稼働していなかったが、今では「カフェたんぼぼ」でクッキーが振る舞われ、数種類のパンが販売されるようになった。まだまだ活用できていないものが多数あるとのこと。利用者の生きがいも1つでも増えるよう、職員一丸となって是非とも頑張りたい。高橋さんからは他にも次々と課題があがる。さらなる専門性向上を目指して資格取得の励行、各種研修への積極的な参加、内部研修・各種委員会活動の充実、地域貢献と新規事業の検討、業務スリム化のための支援ソフト導入、中長期的な修繕計画、離職率低下のためのメンター制度の充実等々と課題は山積みである。

「ようやくスタートラインに立ったようなもの」と語る高橋さんは、これらすべての取り組みを、「変化を怖れず、前向きに一歩ずつ進んでいく」「前進あるのみです」と微笑まれた。「前進あるのみ」と胸を張って言えるのは、事件発覚当時から第三者委員として関わり、現在は理事として改革を推進している山下望、綿祐二、高澤勝美、関哉直人、寺崎勝成、植村義秀の6氏の障害福祉のトップリーダーの存在なくしてはあり得ないと言う。

心から応援させていただきたい。



わたしの

ホッと

ニヤリ

支援を通じた利用者とのかかわり、ご家族との会話の中や地域の方など人が集まるところで偶然出会う瞬間に、「ニヤリ」としたり心が温かくなったりすることがあります。自分だけのものにしておくのは「もったいない」ので、「ホッと」な気持ちが広がっていくように書き留めてみました。

先日、面談をしていた際、正座をしながら話を進めていたら、ご家族の方から「足を崩して話をしましょう」と言っていただきました。自分の足も苦しく、言おうか悩んでいたところだったので助けられた気持ちでした。その後、お互いが苦しかったことがわかり、少し和んだ雰囲気でも面談を進める事ができて良かったです。

知的障害施設で働いていた頃の話です。利用者さんのおやつ対応をし、忙しくしていると、自分の食べていたおやつやジュースを「食べる?」とってくれたことがあります。心の綺麗さに感動しました。

1泊旅行へ行った際、利用者自ら座布団を出してくれたり、お茶を入れてくれる優しい一面を見る事ができました。

以前から食堂に、給食の写真を貼り出していましたが、新しく入職した栄養士がブラックボードにメニューとイラストを描いていて、とても給食が楽しみになりました。またイラストはリクエストでも描いてくれる様ですが、「利用者さんが優先です。」との言葉が素敵だなと思いました。

肢体不自由の方や車椅子の方の手を、冬場は温めようと握る事があります。いつのまにか手を温めている私の方が、心の温かさ、時間は等しく流れている事を、教えられました。

お母様に会えるのがまだ先だった利用者へ、手紙を書く事を提案し、一緒に報告の手紙を書きました。手紙を書いている時も笑顔で、返事を貰い職員が読み上げている時も笑顔になり、読んでいた私も自然と笑顔となり、清々しい気も日になりました。施設全体の高齢化が進む昨今において、ご両親が健在であるうちに、沢山の思い出を残してあげられたと、心が温まりました。

専門学校の先生が巡回訪問に来られた際、学生たちの声を聞かせてくださった。「実習に来て日々刺激を受けて勉強になっている」と喜んでいるとのことでした。受け入れる職員の対応や指導が行き届いている結果だと感じました。中には障害福祉に強い関心を持ち始めた学生もいたとのこと、将来、仕事の仲間になるかもしれないことを考えると、実習生に誠実に向き合うことの大切さを感じました。



支援者の皆さんが『自分の仕事を振り返る』『権利意識を高める』きっかけになればとの想いを込めた川柳のコーナーです。皆さまの投稿お待ちしております。

最優秀作品

少しずつ
横を向く顔
真つすぐに

作・ユーク

—作品背景—
仕事を始めさせて頂いて8カ月が経ちました。はじめは声掛けをしても顔を背けられていましたが、最近、少しずつ顔を合わせて支援をさせていたことが出来るようになったかな、と感じています。

優秀作品

バレ
ン
コ
食
べる
日
なん
だ
か
な

作・匿名希望

—作品背景—
自閉症スペクトラムの方にバレンティンとは何の日？と質問したら、「チョコ食べる日」と答えていました。どこから伝えるべきか悩んだ結果、何も言えませんでした。

入選作品

こんにち
は
明
る
い
笑
顔
見
習
い
ま
す

作・たんぽぽ茶

—作品背景—
施設に入ると「こんにちは」「来たの？」と利用者の方々がいつも元気に笑顔で挨拶してくれます。それを見て自分もこんな素敵な笑顔で挨拶したいと思いました。

大
丈
夫
？
見
つ
め
直
す
そ
の
支
援

作・ケニアゴ&ケニアゴ

—作品背景—
支援をしていると、つい厳しく注意してしまう事があります。その支援をもう一度見詰め直す事が必要だと感じました。

な
い
な
い
と
ゆ
び
さ
す
さ
き
に
う
メ
ニ
ユ
ー
ひ
よ
う

作・きやり〜ぼーぼー

—作品背景—
次の献立表が貼ってない、「ない、ない」と指をさして教えてくれる利用者さん達。食事を楽しみにしてくれているのだなとうれしく思います。

投稿おまちしております

今号は「わたしのニヤリ・ホッと」「川柳ぼーど」でしたが、読者の皆さまから様々な投稿をお待ちしています。

- ①「わたしのニヤリ・ホッと」
- ②「誰か教えて！私の支援間違っていない？」
- ③「川柳ぼーど」

①②の投稿につきましては、紙面の都合上1,200字以内とさせていただきます。原則として原文のまま掲載いたしますが、場合によっては内容を損なわない範囲で加筆・修正させていただきます。尚、事例については、施設・個人名が特定できないようご配慮お願いいたします。

③の川柳のテーマは福祉に関係するものであれば構いません。

投稿は匿名でもお受けいたします(その旨記載してください)。手紙、FAX、メールとお好きな方法で送ってください。

手紙の場合

〒162-8953 東京都新宿区神楽河岸1-1
社会福祉法人 東京都社会福祉協議会
知的発達障害部会 人権擁護委員会宛に送ってください。

FAXの場合

03-3268-0635
知的発達障害部会 人権擁護委員会宛に送信してください。

メールの場合

東京都社会福祉協議会 知的発達障害部会 事務局
s-okabe@tcsw.tvac.or.jp 宛に「じんけんボード投稿」とタイトルをつけて送信してください。

編集
後記

寒い日が続いていますが、皆さんはいかがお過ごしでしょうか？今年度、我が人権擁護委員会のメンバーはがらりと顔ぶれを変え、新たな歩みとなりました。これを機に、一人でも多くの皆さんの心に響くじんけんボードを作っていけたらと思っています。

連日、福祉に関する暗いニュースばかりが取り上げられていますが、明るい話題も豊富にあることを知ってもらえれば幸いです！

仕事に疲れた時には、難しく考えずに利用者に寄り添ってみてください。簡単なようで実は難しい寄り添う心。日々の業務に追われ、忘れていた感情を思い出すかもしれません…。

そんな気持ちになれる情報が詰まった25号が出来上がりました。